

長野県

民俗の会通信

第309号

○木曽上松御神木祭
○黒澤口弘法堂調査報告太田 真理
市東 真一

木曽上松御神木祭

令和七（二〇二五）年六月、木曽郡上松町において、伊勢神宮の「御杣始祭」（三日）及び「御神木祭」（四、六日）が行われた。

神宮の次回、第六三回の式年遷宮は令和一五（二〇三三）年の予定である。その準備が本年から始まった。端緒となるのは「山口祭」で、御用材を伐り出す御杣山の山口の神に伐採と運搬の安全を祈る神事である。古来御杣山は伊勢に定められていたが、適材が減少したため、江戸時代の第四七回（宝永六（一七〇九）年）以降、ほぼ木曽が選定されている。山口祭は現在も伊勢で行われ、今回は五月二日であった。これを承け上松町で行われたのが「御杣始祭」と「御神木祭」である。両祭の違いは、御杣始祭が神宮の神事であるのに対し、御神木祭は木曽の民の行事だということである。

三日、JR上松駅に降り立つと「伊勢神宮御神木奉賛」の幟が迎えてくれたが、御杣始祭は赤沢自然休養林で行なわれているので駅前には静かだった。関係者のみの臨席による神

太田 真理

事であるが、その様子はテレビで生中継されていた。観光案内所で情報をいただき、化粧がけが行われる施設よろまいか（上松町小川）に出かけることにした。

当日は雨模様であったが、伐採（杣夫の言葉では「寝かす」という）は粛々と行われた。今回伐り出されたのは、御遷宮の際に御神体を納める箱「御樋代」を作る「御樋代木」で、御用材の中でも最も神聖なものと言われる。純白の作業衣を身にまとった杣夫により、内宮用、外宮用二本の御神木が、幹に三方向から斧を入れる「三ツ紐伐り」（伊勢での呼び方は「三ツ緒伐り」）で伐採された。この時、二本の御神木が交差するように寝かせるのが習わしだという。寝かせた後は木の梢を切株に刺し木の神に返す「鳥総立て」が行われた。御用材はトラックで麓のよろまいか駐車場へ運ばれ「化粧がけ」を行なった。私が実際に見学したのは、ここからである。

化粧がけとは、御用材の長さを六・六mに整え、両端の樹皮を剥ぎ、断面を十六の面に



写真1 化粧がけ（よろまいかにて）

担当である。神宮から示された仕様に従い、斧のみを使って作業をすることは伐採と同様大変神経を使うとのことのお話であった。夜も更け、都合により途中までの見学となったが、両端のしかるべき位置に鋸を打つところまでが杣の仕事、その後、奉曳に備えて菰を巻き、奉曳車（台車）に載せ、神を飾る作業は、上松の若連の一つで中心的に奉賛を担う上若連に引き継がれた。全ての作業が終了したのは午前三時だったそうである。

翌四日から六日は御神木祭で、四日が「奉曳行事（お木曳き）」、五日が「駅前奉祝イベント」及び郡内芸能祭、六日朝に御神木を送

削り出す作業をいう。両端は正面から見ると菊の花に形作られる。

午後五時トラックが到着。内宮用は木曽の杣夫の、外宮用は伊勢の

長野県民俗の会通信三〇九号

二〇二五年九月一日

会費年額 五、〇〇〇円

長野県民俗の会



振替 〇〇五二〇一三一三六五七

長野県民俗の会

E-mail: info@nagano-minzoku.chu.jp

URL: <http://nagano-minzoku.chu.jp/>